

た。他の一人が「動かないで、動くよ弾が飛んで来る」というので腹這いになって伏せていた時、左足にパッシイと感じた。幸いにして編上靴の踵で無傷で助かった。再度のお陰をいただき感謝の外ない。

銃声もおさまり、間を見て後方に下った。セブ島も一応安定してきて住民も帰って来るようになってきた。突然に中村曹長殿が迎えに見えた。何だろうと思つて行くと、初年兵が入隊して帰還兵の準備に忙しく、證明書等書類整理作成である。漸く帰還の日が来たと思つた処、衛生兵は初年兵の教育があつて自分一人残ることになり、本科兵は別れを告げ帰途につき、ただ一人で茫然としていた。

初年兵の基本教育が終わり帰還する事になり、セブで別れを告げ見送つて貰つた時涙がこぼれてきた。健闘を祈つたルソン島の連隊本部に引上げて、軍旗に遥拝、連隊長殿に申告を済ましてマニラ港を出港、十二月無事に生還。

今ここに五十回忌を迎え、英霊の佛前に祭文を奉読して、ひしひしと胸を打つ。生前を偲び合掌。平穩に

過ごせる今日の喜びこそ、ご加護の賜と感謝の念で一杯である。壮烈無比なる戦死を遂げられた武勲は、平和の礎として永久に光彩を放つものである。

ミンダナオ戦線従軍記

愛知県 大矢 昌 男

独立歩兵第六十四大隊第一中隊要員として広島に着いたのが昭和十八年四月三日だった。輸送船に乗せられ五月十七日にミンダナオ島ダバオに到着、一期検閲後衛生兵となる。

十九年七月、大隊は移動討伐のため敵中突破して前進、バカデアンに向かう。小雨降る闇夜、部隊は蕭々と進む。湿地帯の一本道、前方はうすぼんやりと森らしい。突然パンパンと銃声、道の両側にびたりと伏しすぐに応戦、パンパンパンバリバリ、彼我の銃声は豆を煎るごとく・・・と、四、五メートル先でうなり声、あつ誰かやられたな！と思ひ首を上げる。

しゅーしゅーと敵弾、シュ、シュ、これは地面すれすれに飛んでくる。一刻も早く行かなくては心はやれども、銃声はますます激しくなるばかり。えいままよ、と道路上に這い上がり、転がるようにしてうなり声に近づき「どうした何処をやられた。」と叫ぶ。体に触れると胸にべつとり血の感触、手探りで上着のボタンを外し手で触ってみる。背中に手を回してみる。指先に堅いふくらみを感じる。胸部盲貫銃創だ。「しっかりとしろ、急所は外れているぞ」と励まし応急手当をする。傷口を拭きガーゼを詰め、当てガーゼをし絆創膏でしっかりと止める。

闇夜弾雨のなか、手探り作業は心はやれども思うにまかせず、彼我の銃声はますます激しい。そのうちに味方の擲弾筒がどーんと撃ちだした。その音のなんと力強く頼もしく感じたことか。敵は沈黙した。遁走したらしい。ずいぶん長く感じたが古年兵は「二十、三十分ぐらいのものさ」と事もなげにいう。さすが古強者と感心。手当をした負傷兵、どうか助かってくれと神に祈りたい気持だった。

小雨降る暗夜を部隊は静々と進む。何事も無かったように。翌日軍医の話によれば、負傷者は弾の摘出手術をして助かるとのこと。やれやれ、よかった。肩の荷が降りた気がした。その時戦死四名、負傷数名とのこと。パカデアンに着くまではこんな状況が続いた。

二十年五月上旬、米軍がダバオ川右岸に来襲、戦況重大なり。直ちに米軍を迎え撃つが圧倒的に優勢な敵の前に我軍の苦戦筆舌につくせず、地獄のなかの火の雨か自分は負傷者の応急処置に、戦死者の遺体収容もままならず、片腕、手首または小指だけを遺骨として収容した。

また砲弾で跡形も無く吹き飛ばされた者あり、この世の地獄さながらであった。制空権を敵に握られ近代兵器の物量の前、大和魂もいかんともなしがたく、じりじりと山岳地帯に追い詰められた。激戦で多くの戦死者が出て中隊の人員はわずかになった。本部、友軍との連絡も絶えた。それからは山奥の道なき道をあえぎあえぎ、尾根を越え谷に下り、また尾根に登り奥へ奥へと落ち延びた。

やせ細り、目だけギョロギョロ、足もとフラフラ、二カ月もろくに食べていない者ばかり。とくに悲惨なのは邦人難民、死んだ母親の乳房にしがみつき、やせ細った赤子が泣いている。なにか食べものをと訴える老婆、虚ろな目をして半分死んだような人、死体となって蠅やうじが集まっている人、兵隊も邦人も明日の命は風前の灯火。疲れた身体に鞭うって至上命令である本部追及のため山奥へ奥へと向かった。

やっと連絡がとれたが食料の支給はゼロ、自給体制に入るとまた山中を移動、ウビアンに着いたが食料全然なし。また転進移動。体力は限界までに衰弱。このままでは餓死は明白だ。切込隊の名目で一隊が山を下りると続いて五人、十人とばらばらに山を下る。その道中の惨たらしさ、五十メートルぐらいに死体となって道端に横たわっている。悪臭プンプン、蠅が真つ黒にたかり、うじがわいている者、すでに白骨となった者、虚ろな目をわずかに開き、いまにも死にそうな者、まったくこの世とは思われない有様だった。

明日は自分の姿かと思ひ、ぞくぞくと悪寒がする。中

隊長いれて六人、皆栄養失調でフラフラしながら幾日か歩いて平地に出た。幸い近くにカモテカホイ（木の芋）があり小川も流れている。六人で天幕を張りそこを本拠にして自活体制に入る。毎日食料探しに明け暮れる。トタンに穴あけ、おろし金としてカモテカホイをすりおろし、団子にして焼いたり塩汁に入れすいとんにして食べた。ある晩、急に目の前が真つ暗になり、しばらくポーと立ち尽くしていた。そのうち少しづつ見えるようになりほっと安心した。栄養失調が目につきたものと思う。

二十年八月十七日、飛行機より無条件降伏のピラがまかれた。中隊長はデマだ、謀略だといった。そういえばここ二、三日爆撃もなければ砲撃の音もしない。信じられない。いや本当かも知れない。複雑に心は揺れ動く。いったいこの戦は何だったんだろう。その後各隊との連絡も取れ、本当だと思ふようになった。投降したらオーストラリアに送られ強制労働だとかいろいろのデマが飛ぶ。九月になって情報も確かなものとなり、部隊命令が出て収容所に向かったのは二十日こ

ろと記憶している。

二カ月の収容所生活を経て、故国日本の浦賀に入港、懐かしの故郷三ヶ日村に帰つたのは二十年十二月二日だった。

長い人生のなかではわずか二年八カ月ではあるが、心の中では最大のウエートを占めている出来事であった。多数の戦友が戦死した中で幸運にも生還した自分は、戦争の悲惨、非情、愚かしさを子孫に伝えることが我々の責務だと思ふ。そしていかなることがあつても、再びあのようなことがあつてはならぬと声を大にして叫ぶものである。それが英霊に対する供養だと思ふ。

ミンダナオの餓死行

愛知県 松井 駿 平

昭和十九年六月、ミンダナオ島北西部海岸のカガヤンに上陸した第二百二十五野戦飛行場設営隊は、十月二

十二日敵の大空襲を受け、続いて二十四日レイテ島に敵上陸の報により飛行場設営を中止し、奥地に移動することになった。

二十年四月、南部コタバトにも敵が上陸北進するに至り、部隊は中央山地のマナゴックからさらに東海岸を目指して地図にもつていない山中を東進することになり、物資搬送は専ら人力に頼る苦難の行進が始まった。総員二百二十二人の小部隊は、わずか八十挺の小銃しか持たず、連日、敵機の哨戒下の行軍だった。

五月末突然、戦備下令があり、行軍の速度が早くなり、取り残される糧秣その他の物資が多くなってきた。敵機は相変わらず飛び廻り、一山隔つた日本軍を爆撃している。包囲全滅を恐れた司令官は離脱するために予定を変更して独自の行動を取ることにになり、十日分の食糧を持って東に向かつて急進を命じた。何故、敵を迎えて戦わないのか、全力を振るつて花と散れと、意見具申したが容れられなかった。

苦心して運んだ食糧も薬品も大部分を置き去りにして、わずか靴下に三本位の米を持ち、当てもない先の